

自己点検評価（工学部英語科目運営会議）

2021年1月31日提出

1 学習・教育到達目標

【実施状況】

工学部の教育体系において、高度な専門科目を学ぶために必要な基礎力を養うための基礎・教養科目を構成する科目に言語科目（英語科目）があり、英語科目運営会議では、この英語科目の運営を担っている。英語科目はグローバルに活躍する技術者に必要な英語コミュニケーション能力を修得するための科目である。学生は英語科目を学ぶことにより、確かな基礎力の上に、将来的ニーズに即した英語力、工学研究や実務につながる応用力をつけ、英語で情報を収集し、発信するための知識や技能を修得する。

英語科目のカリキュラムは、工学部9学科の各学科における教育方針、カリキュラムポリシーにより設定された以下に示す学修教育到達目標と連動し、技術者に求められる能力を身に付けた人材を育成するものとなっている。

<機械工学科>

C 他人と協力して物事を成し遂げる能力を身に付ける。

C-2 英語の基礎的なコミュニケーションスキルを活用して、情報交換を行うことができる。

<機械機能工学科>

A グローバルな視点で社会の問題を理解し、技術者としてどうあるべきか、個人やグループで考える力が身につく。

A-2 スキル関連

<材料工学科>

I 技術者、研究者としての幅広い教養と社会性

I-b コミュニケーション 語学、情報技術を修得し、国際化・情報化社会に対応できる情報収集・発信能力を獲得する。

<応用化学科>

C 常に自己研鑽を怠らず継続的な自己啓発を行う。

国際的に仕事をしていく準備として英語のコミュニケーションの基礎能力を養う。

<電気工学科>

F グローバルな社会に通用するコミュニケーション能力。

F-2 国際コミュニケーションの基礎となる英語などで書かれた技術文書を理解し作成できる。

<情報通信工学科>

F コミュニケーション能力

F-2 :国際コミュニケーションの基礎となる英語で書かれた文書などを理解し、作成することができる。

<電子工学科>

A 豊かな教養を持ち、幅広い視点から物事を考え理解する基礎的能力を身につける

<土木工学科>

I 論理的な技術文章の作成能力、プレゼンテーションやディスカッションなどのコミュニケーション能力 および英語による基礎的なコミュニケーション能力を身につける

<情報工学科>

F 技術者としてのコミュニケーション能力

F-2 英語による基礎的なコミュニケーション能力

2019年度よりカリキュラムを改定し、各学科において1年次の必修科目として「Reading & Writing I」(前期)、「Listening & Speaking I」(後期)を開講しており、基礎力の養成が必要とされる学生から、基礎力を保持して入学したと判断された学生まで、レベル別に分けた授業を実施している。全新入学生にプレースメントテストとしてTOEIC IPを受験させ、そのスコアをもとにレベル別のクラス分けを行っている。2020年度はプレースメントテストを実施することができなかつたため、入学者選抜における点数や提出書類を英語力の判断材料としてレベル別クラス分けを行った。

選択必修科目、選択科目としてReading /Writing 科目、Listening /Speaking 科目、工学英語科目、TOEIC 科目を開講し、より高い英語力の学生を対象としている「Reading & Writing II」, 「Listening & Speaking II」, 「TOEIC II」の3科目はTOEIC 500点前後の英語力を受講目安としてシラバスに明記している。専攻する分野で必要となる英語力向上のため、専門科目より要望が多かった工学英語科目のコマ数を多く用意している。

現状のカリキュラムでは、1, 2年次で一般的なコンテキストでのReadingとWriting力およびListeningとSpeaking力の養成を図っている。これらは専門学群ごとに時間割を編成している。工学系コンテキストでの英語力を養う科目としては、「工学英語 I」「工学英語 II」があり、主に2年次以上を対象とした科目である。専門学群ごとに時間割を編成し、専門に近い内容を柔軟に追加できるように工夫している。

さらに、学生の専門科目における英語ニーズに対応すべく、3年次以上を対象とした、専門科目または基礎教養科目としての英語科目を以下のように開講、または開講予定である。

機械工学科 3年次専門科目「工学英語 III」(2021年度より開講予定)

機械機能工学科 3年次専門科目「工学英語 III」(2021年度より開講予定)

材料工学科 3年次基礎教養科目「工業技術者英語」(2021年度より開講予定)

応用化学科 3年次基礎教養科目「ビジネス英語」(2021年度より開講予定)

情報通信工学科 3年次専門科目「情報通信技術英語」(2019年度より開講)

情報工学科 3年次専門科目「情報通信技術英語」(2019年度より開講)

また、「スーパーグローバル大学創成支援事業」で目標とする学生の英語力(TOEIC スコア 550点以上)やグローバルコミュニケーション力(CEFR B1以上)を達成するため、学生課・学術情報センターの協力を得て TOEIC スコアの自動集計システムを利用し、正課必修授業科目「Listening & Speaking I」および正課授業「TOEIC I」, 「TOEIC II」に取り入れ最終成績に反映している。

【点検評価】

現状のカリキュラムは 2019 年度から実施している。各学科の学修教育到達目標で共通に掲げているグローバルな人材育成に必要なコミュニケーション能力の育成については、1, 2 年次で一般的なコンテキストでの英語力の養成を主に行い、2 年次以降に工学コンテキストでの技術者に必要な英語コミュニケーション能力の養成を行っている。また、3 年次各専門学科で開講している英語科目によって、各学科のニーズに準拠した英語力の養成を行っている。卒業に必要な条件として、英語科目の単位数は以下のようにしており、この必要単位数を取得できるカリキュラムを提供できている。

機械工学科 10 単位

機械機能工学科 10 単位

材料工学科 10 単位

応用科学科 10 単位

電気工学科 10 単位

電子工学科 8 単位

情報通信工学科 6 単位

情報工学科 10 単位

土木工学科 10 単位

2020 年度前期はコロナ禍によりオンライン授業となったが、ほぼ予定していた時間割通りに授業を開講できた。オンラインということでキャンパスに関係なく履修ができたため、大宮と豊洲キャンパスで開講している科目では、英語の学力が大きく異なる学生の混在がみられた。今後もオンライン授業の形態を残していくことがあれば、学生の能力に応じた授業を履修できるようなカリキュラムの工夫と検討をさらに進める必要がある。

2 教員

【実施状況】

工学部英語科目運営会議の専任教員の 2020 年度においては 5 名となっている。教授 4 名、准教授 1 名の 5 名で構成されている。理工学での博士号取得者が 4 名、英語教育学での修士号取得者が 1 名である。全員が大学院レベルで英語教育を専攻している。2019 年度に英語授業を担当している非常勤教員数は 24 名であった。2020 年度前期では、辞退のあった非常勤教員の補充ができていないままのスタートとなったため、非常勤講師は 22 名である。非常勤教員全てが、英語教育学、教育学、言語学、情報学もしくは英文学で博士号もしくは修士号を取得している。また、全員が日本の大学レベルで 1 年以上の教授経験がある。非常勤講師の採用は公募を行い、教育研究業績を精査するとともに面接を行った上で候補者を決定、資格審査委員会で承認を得ている。加えて、次年度の授業担当を依頼する際に、教育において工夫した点についての記述箇所を設け、提出を毎年義務付け、能力や資質を評価している。

科目運営会議構成員は 2019 年度より各学科に所属し、各学科と連携している。2019 年度では、機械

機能工学科，応用化学科，電子工学科，情報通信工学科，土木工学科に各 1 名所属しており，学科の英語教育に携わるとともに，各学群の英語教育を担当している。学群ごとに必修科目，工学英語科目の時間割編成をしており，それぞれの科目において各学群を担当する専任教員が 1 クラス以上担当している。

また，上記項目 1 で示した，3 年次以上を対象とした専門科目または基礎教養科目としての英語科目を科目運営会議の専任教員が担当している。

【点検評価】

英語授業のカリキュラムおよび内容の決定と授業担当については，専任教員の経歴および業績から判断して，現在の教員構成は適切と思われるが，カリキュラムや授業の評価と改善については，専門の教員の雇用もしくは現在の教員の専門性向上が必要と考えられる。2019 年度，2020 年前期において大学院での授業を担当する専任教員は 3 名であり，2019 年度以前の組織体制より博士号を持った教員の採用を行い，また教員の博士号取得により大学院授業を担当できる専任教員が増加している。非常勤教員については，教育研究業績書からは，教育能力や資質の把握が難しい場合もあるため，点検評価を行う別の方策が必要である。

専門分野での英語教育を運営会議構成員が担当することにより，学科・学群のニーズに対応した英語教育につながっている。さらに，専門に関連した英語教育について運営会議構成員の理解が深まり，専門授業担当教員が英語教育をより理解することにつながっており，相互の連携体制の強化ともなっている。

3 教育プログラム

【実施状況】

英語科目はすべて 2 単位であり，Reading / Writing 科目，Listening / Speaking 科目，工学英語科目，TOEIC 科目を開講している。

必修科目である「Reading & Writing I」および「Listening & Speaking I」により基礎的な 4 技能を習得することを目的としている。必修科目で習得した基礎的な 4 技能をさらに応用させることを目的とした「Reading & Writing II」および「Listening & Speaking II」を開講している。2 年次以上を対象とし，より英語力の高い学生のための科目のため，履修する準備として TOEIC500 点前後の英語力があることが望ましいとしている。

理工系の英語の基礎的語彙・表現などを学ぶ「工学英語 I」および「工学英語 II」を開講し，専攻する分野で必要となる英語の読解力および表現力の基礎を養うことを目的としている。学科，学群ごとに時間割を編成し，学科，学群のニーズに合ったカスタマイズができるようにしている。

さらに，理工系の企業の採用や昇進・昇格にも使われている TOEIC のスコアを伸ばすことを目的とする「TOEIC I」および「TOEIC II」を開講し，「TOEIC II」は TOEIC500 点前後以上の英語力のある学生に履修を推奨している。

英語科目の授業はすべて講義形態であるが，40 名以下の少人数クラスで，アクティブラーニングを積極的に取り入れた授業を行っている。また，公正な評価，授業の質保証のため，シラバスを統一しており，必修科目では定期試験の 40%と課題を統一している。2019 年度の開講コマ数は前期 102 コマ，後

期 104 コマの計 206 コマであり、各授業科目の開講コマ数は以下に示すとおりである。

「Reading & Writing I」：42 コマ

「Reading & Writing II」(2020 年度より開講)

「Listening & Speaking I」：45 コマ

「Listening & Speaking II」(2020 年度より開講)

「工学英語 I」(2019 年度は「学英語 IA」の名称)：28 コマ

「工学英語 II」(2019 年度は「学英語 IB」の名称)：27 コマ

「TOEIC I」：35 コマ

「TOEIC II」：8 コマ

そのほか旧カリキュラムの科目：21 コマ

学生の自主的な学修促進に関しては、大学が提供する短期語学研修プログラムや TOEIC L&R IP テストの受験の推奨を授業内で行っている。学内で行われる TOEIC L&R IP テストの任意受験や春・夏の海外短期語学研修プログラムについて英語授業全クラスで授業担当者がチラシを配布し、アナウンスして推奨していることで、参加学生が増加している。2020 年度前期は TOEIC L&R IP テストがオンラインでの受験となったが、授業内での周知以外にも、授業支援システムの Scomb で授業ごとの Community を作成し、受験必須対象者、推奨対象者への受験を促すアナウンスをしている。

また、学習サポートにおいては、英語学習サポート室に月～金曜日の 4,5 時限に各曜日英語教員 1 名が大宮キャンパスに常駐し、正課授業や一般的な英語学習、TOEFL や IELTS 受験に関する相談に応じている。英語科目運営会議構成員の専任教員のうち 1 名を学習サポート室担当とし、必要に応じて支援を行っているほか、学習サポート室指導記録を科目の会議で報告している。2019 年度は必修の英語授業とリンクさせ、語彙テストを希望者に実施した。2020 年度はオンラインでの学習サポートを行い、同様の取り組みを実施した。加えて、専任教員全てがオフィスアワーを設定しているほか、非常勤講師も含めて全員の教員が授業前後に学生からの質問に応じている。

また、必修科目に e-learning を取り入れ、学生の自主的な学習を促している。

【点検評価】

専任の学部英語授業の担当コマ数は、半期で 6 コマである。専任と非常勤の授業担当割合であるが、2019 年度に専任教員が担当した英語授業コマ数は、全体の 29% である。非常勤教員への依存度は約 70% あるので、改善が必要と思われる。

オフィスアワーや面談、質問の時間を設けるなどの方法に加えて、学習サポート室での学修支援を通じて、学生支援の試みは十分に行われていると思われる。学習サポート室に関しては、必修の英語授業とリンクさせた取り組みを行っていることで、学生の利用率は高くなっている。より利用しやすい時間帯での開室や講座を設定すること、利用を促すため英語の授業内容と学習サポート室が連携を行えるような授業設計の工夫が必要である。